



Hirosima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.36 (2010.1.25)



来年度、画期的な教室の完成を目指して

～語学センター新教室の始動と展望

語学センター専門委員長・国際学部准教授 渡辺智恵

■ 「勉強したくなる！」機能美を徹底追求

夏期休暇中に行われていた、語学センターの第一期機器更新が完了し、10月の後期開始と同時に利用可能となった。今回の機器更新は、前回（2004～2005年）ほどの大がかりな変更はないが、以下では、これまでの語学センターから変更になった、特筆すべきいくつかの点について述べたい。



◆ 403B 教室学生ブース（上）と
404 教室教卓（下）

まず目を引くのは、403A、403B、404教室の教卓コンソールと学生ブースのデザインだ。デザインを決める上でキーワードは「機能美」。単に必要な機能が使えるだけでなく、見て「美しい」ものを作ろう、使う人や見た人が「わあ、すごい」、「ここで勉強してみたい」と思うようなものにしたいと、ワーキンググループでの検討を繰り返した成果である。

これまでの教卓は、各種モニターが横一列に配置された單なる横長のデスクであり、操作ボタンもデスク上の複数箇所に散らばっていた。そのため、別のモニターを見たり、新たな操作を行うたびに、教師は教卓を左右に大きく移動する必要があった。新しい教卓デスクは、教師を取り囲むような形にデザインされているため、各種モニターも頭を少し左右に動かすだけで見渡せる。キーボードや操作ボタンも一ヵ所に集約されており、動かず座ったままほとんどどの操作が行える。イメージは宇宙船のコックピットだ。また、キーボードや操作ボタンは、デスクの天板下にスライド式収納され、必要な時に引き出して使う形になっているため、デスク上はスッキリしていて使いやすい。

学生ブースのデザインも斬新だ。デスクの天板は、柔らかい肌色のパネルと色の濃い革張り調のパネルを組み合わせ、重厚感を出している。革張り調パネルの色は、各教室のイメージカラーに合わせてあるため、これまでより一層、各教室のカラーが演出されるようになった。キーボードは、教卓と同様、デスクの天板下にスライド収納されているので、キーボード入力を必要としない授業でも邪魔にならない。

■ 2教室連動で一挙に TOEIC 実施

次に目につくのは、403A教室と403B教室を仕切る壁にドアが新設されたことである。この2教室にはもともと、403A教室の映像と音声、教師用PCの画面を403B教室に配信することにより、2教室合同で授業を行える機能が設けられていた。しかし、403A教室から合同授業を行う教師には、403B

目次：

語学センター新教室の始動と展望	1
語セ専門委員長・国際学部 渡辺先生	1
ミニコラム：国際学部 池田寛子先生	2
編集室・共同研究室の利用	2
10月の字品：調査と隠蔽	3
県6大学間連携イベントとドラマ映画祭	
国際学部 岩井先生寄稿 他	4

教室にいる学生の様子がまったく分からず不安だ、様子を知りうと思えば、403A教室から廊下に出て、403B教室に行ってまた戻って来なければならないため、授業が非常にやりづらいという声があがっていた。そこで今回の機器更新では、両教室の間にドアを設け、ドアを開けておけば、すぐに403B教室の様子を窺うことができるよう工夫した。実際、12月中旬に実施した「CALL英語集中」の受講後TOEICテストの際に、2教室を連動させて使用してみたが、ドアを開けて両教室の間に立つとすべての学生が見渡せるため、様々な指示を不安なく与えることができた。学生の側も教師に用がある場合、すぐに声を掛けることができるので、安心感があると思われる。ドアは防音仕様になっているため、ドアを開めて2教室を別々に使用する場合でも、隣の教室の音がうるさくて授業にならないというようなことはない。また、連動使用以外、ドアは施錠されており、隣の教室から誰から突然侵入するなんてことはないのでご安心を。



◆ 12月 TOEIC 実施時の 403A（右、通路に渡辺准教授）・403B 教室（左）

その他目立って異なる点は、各教室で収容できる人数が増えたことだ。403A・403B教室の定員はそれぞれ52名であったが、今回の機器更新で61名まで収容可能となった。404教室の定員は63名から76名に増えた。これにより、定員オーバーで講義棟へ教室移動を余儀なくされることもほとんどなくなった。

以上、今回の第一期機器更新で特に目につく変更点についてのみ述べたが、この他にも、各先生や授業のニーズや要望に対応すべく、様々な工夫がなされ、利便性の向上が図られている。来年度8月から9月にかけて、第二期機器更新が行われ、これで今回の機器更新はすべて完了する。第二期機器更新では、従来の語学教室では見たことがない、まったく新しい画期的な教室も完成する予定である。新語学センター完成の暁には、多くの先生方や学生、外部訪問者の方々に利用してもらい、その先進性、斬新さ、快適性を実際に体験してもらいたい。

ミニコラム 外国語に想う【31】



刊行間近の訳詩集の原作者の

ヌーラさんと平和公園にて

「おそらく私が好きなのは・・・」

国際学部 准教授

池田 寛子

とある食事会で目の前に座っていた3年生に、「先生はずっと英語が好きだったんですか」と問われ、一瞬、返答に詰まった。高校の時にお世話になった英語の先生に「語学の感性がある」とほめられたのを真に受けてしまったのか、いつしか私は「英語をがんばれば、英語を使ってなんとか食べていくこともできるかもしれない」などと思うようになっていた。こんなことを話した後で私は、「でも、ひょっとしたら英語でなくてもよかったのかもしれない。最初に出会った外国語が、韓国語か何かほかの言葉だったとしても・・」と言いはじめていた。

現在私がのめりこんでいるのは「英語の侵入によって絶滅の危機にさらされるようになつた言語」である「アイルランド語」の世界。日本語とは似ても似つかない言語を少しずつ自分に引き寄せていくうちに、視界が広がってゆく、その快感を追いつづけているのだろうと、自己分析してみる。アイルランド留学中に英語を介してアイルランド語を学びはじめたが、いまだに思ったことをすらすらとアイルランド語で言える、などといったレヴェルにはほど遠い。それでも今年は、どうしても読みたかったアイルランド語の論文を一本、一ヶ月かけて少しずつ解読し、完全にではないが、なんとか大筋は理解した、という実感を持った。およそ10年前に手をつけたアイルランド語の詩集の翻訳は、ようやく2010年3月に出版の運びとなる(『ヌーラ・ニゴーノル詩集—アイルランドの人魚歌』)。日本語とアイルランド語のあいだにかけた一本の綱をゆっくりと行ったり来たりしているかのような翻訳作業は、どこかあぶなっかしく、時にもどかしくもあり、いつまでたっても終わることはないようにも思われた。言葉が紡ぎだすこまやかな陰影に目を凝らし、どこへともなく遙々とつづく未踏の地を見渡すこと、私はこれが好きでたまらなくて、このために生きているようなところさえある。外国語を学び、これによって世界を広げようともがいている学生の皆さん近くにいて、応援し学びつづけたいと思う。

What's going on in the Language Center ??

編集室・スタジオ

音声・映像編集の穴場



編集室で作業する沖村くん

PV) や、映画の制作、音声編集を行いたい学生には、穴場的存在になっています。

11月には、大学祭実行委員である、情報科学部2年生の沖村秀哉君が、大学祭が終わってから約1ヶ月間、大学祭の準備から当日までの活動写真をまとめ、PVを制作するために、毎日編集室を訪れていました。その沖村くんから、以下のようなコメントをいただいている。

「サプライズでPVを作ろうと思うのであれば編集室を利用してみると良いと思う。見つかりにくい上に器材はばっちりそろってあるからだ。

国際だけでなく情報の人もぜひ足を踏み入れて欲しい。またここを利用するにあたり出会う人との素敵なお会いも大切にして欲しいと思います。」

学生からこのようなコメントいただけるのは、嬉しいことです。本格的な機器が揃っている編集室・スタジオ！あなたも一度使ってみませんか。

共同研究室

社会人の英会話のクラス

「社会人の学び直し英語eラーニング講座」(平成21年度第2期)が、8月31日～9月30日まで広島市立大学の語学センターで行われました。プログラム内容は、「受容技能・文法力養成プログラム」「発表



カンバセーションクラスの様子

技能養成プログラム」「小学校英語教育指導者養成プログラム」「通訳ガイド養成プログラム」と4つあり、受講者は好きなプログラムを選択して受講することができます。

4つのプログラム以外に、カンバセーションクラス(1回/60分)も設けられており、受講者は希望をすれば、期間中に3回行われるカンバセーションクラスに参加することができます。今回は、共同研究室を使用し、カナダ人の先生をお迎えして、カンバセーションクラスが行われました。

参加者の中には、育児中の主婦の方や仕事の合間を縫って参加されている方も多く、忙しい中、自分の英語のブラッシュアップのため、積極的に英会話に参加されている姿が印象的でした。参加者の方からは、「カンバセーションクラスを楽しみにしている」、「これからもこういう機会を作って欲しい」という好意的な意見も多く聞かれました。

周一四方のまなび2

10月の字品：調査と隠蔽

中国新聞記者、金井利博（1914-1974）の主著『核権力』三省堂‘70、通説中に予期せぬ「加藤周一」の名の記載に目がとまった。合同調査団リストの日本側メンバー15人のひとり。註も何もないからちょっと妙な気持ちになる。日本人の肩書きは全員、「博士」*。

加藤周一は1945年10月12日（前号、「9月」は誤まり）広島に着任した。都築正男**の「任命」で合同調査団に「参加」したのだ。小森陽一は「原爆の被害を隠蔽しつつ調査するために来たアメリカの調査団に連れられて、被害の実際の調査をせざるを得なかつた」（「現代思想」09年7月、第37巻第9号、74頁）とするが、下線部どうか。「米国軍医団が東大医学部に申し込んだ共同」研究への「参加」に、加藤の意志が皆無であったとは思われない。

『二〇世紀の自画像』ちくま新書、110頁で調査団は「学校の一つ」を借りたとある。この「学校」は「広島陸軍船舶練習部（旧大和紡績工場）」である。「練習部」とは教育機関のこと（青木笙子『「仲みどり」を探す旅』河出書房、214頁の図参照）。

『核権力』によれば「広島・長崎の人体被爆は／『戦争医学』のために研究調査された」。「日本側の学者は／『平和医学』の立場から、この調査に協力したが、結果的には肝心の研究成果の大部分を米陸軍病理研究所へ持ち去られた」。「核兵器の効果測定に次ぎ、核兵器の開発工程上の防護対策にも広島・長崎のデータは利用された」。米軍側の原爆関係研究の抑圧と独占の例として今堀誠二『原水爆時代—現代史の証言』三一新書、の記述が引用される。「10月14日には米軍のメイソン大佐以下23名が宇品に到着／この頃になると原爆研究をアメリカの独占に移そうとする意図が露骨に現われ、あらゆる研究資料を没収し、戦利品として押えてしまった」。

金井が引用したリストの出典は「災害との遭遇—広島の医学日記1945年」（「広島医学」第20巻1967年に訳載）。***その筆者はアベリル・A・リーボー。『続 羊の歌』に「イエイル大学から来ていたL中佐」、「L中佐は病理学的検査の仕事に没頭」していたとあるアメリカ人軍医である。

以下、広島県立図書館で閲覧したリーボーの「医学日記1945年」から、加藤周一関連記述を主に、摘記しておく。サイパン島で転居命令を受けたリーボーは9月20日東京着。翌日GHQで都築正男と会う。22日東大医学部で合同調査団初会合。マッカーサー顧問軍医大佐が挨拶で学術性を強調。「人類の要望」を口にしている。その折の「合

同調査団の委員」のうち5人の集合写真に加藤周一がいる。10月3日全員、立川へ。「すでに用意ができているのは礼儀正しい独身者の加藤医師で、かれは広島で初期の44例の記録を完成する仕事を手伝うことになっていた」。

10月12日加藤ら日本側グループ、2機のC-46型機で立川発、広島へ。14日メイソン宇品着。「日英両語による記録作成と資料共有」を定める。日附不明で「宇品における合同調査団の研究室グループ」として加藤の写る2枚めの写真がある。『続 羊の歌』での「L中尉」[J.Philip Loge]もいる。

10月下旬「中尾医師と加藤医師の求めに応じて、宇品における初期の一連の調査（中尾）で調べた患者について経過観察を行なうべきかどうかを討議した」。「両氏は血液学的検査と脊椎穿刺」の準備をする。一『続 羊の歌』にいう「破壊という面からだけではなく、その恢復過程という面から」の調査の必要、それは治療の視点があつてこそ考えられる調査ではなかろうか。

米国占領軍の「解放軍」側面を加藤は強調する。それだけ、戦時下の人間性圧殺を想像せよという告発になる。だがしかし、軍事の占領軍が即、言論の解放軍で



MINERVA SCACCIA I VIZI DAL GIARDINO DELLA VIRTÙ
マンテニヤ画、1497-1502、ルーブル美術館（部分）

あることはない。

“知の巨人”加藤周一の「自己反省」****は重い。筆者は一知半解の小人だが占領軍の検閲による隠蔽の罪は大と思う。原水爆禁止運動は1954年、ビキニ「死の灰」を浴びた焼津漁港のマグロ以降のこととなる。反核理性は遅延した。

[*加藤周一が東大より医学博士の学位を得たのは1950年2月2日であるから、45年時点でのこの称は誤記である。ちなみに学位請求の提出論文は「X線大量照射がモルモットの造血器官に及ぼす影響の病理」ならびに参考論文3篇（矢野昌邦作成「加藤周一年譜」による）。**都築正男 東大名譽教授。旧海軍軍医少将。『続 羊の歌』に合同調査団での冗談、「今は／協力して／いる。しかしこの次の戦争では」云々が記録されている。46年1月の公職追放令の該当者。リフトン『ヒロシマを生き抜く』岩波、下巻145-6頁参照。「都築資料」はヒロシマの原点となる資料でGHQ検閲で多くが当時公表できなかつた。***Averill, A. Liebow: Encounter with disaster — A Medical Diary of Hiroshima, 1945. The Yale Journal of Biology and Medicine, 38, 2, 1965.****『二〇世紀の自画像』119頁。]

（一知半悔小人）

英語学習者必見！初の県内6大学間連携イベント

Wanna join us? – Oral Presentation & Performance (OPP) Event

岩井 千秋 (国際学部教授)



安田女子短大生によるミュージカル

せっかく勉強しても使う機会がない、練習ばかりじゃ退屈。
英語学習者のそんなジレンマ解消にスタートさせたのが Oral Presentation & Performance (OPP) です。これは、私が所属する学会の先生方に呼びかけて始めた研究実践企画で、初回イベントを去る11月7日に本学講堂小ホールで行いました。当日は県内6大学（広島女学院、安田女子短大、広島国際、県立広島、広島国際学院、そして本学）から先生方と学生さんにご参加いただきました。発表者総数は71名、延べ来場者数は150名を越え、予想を遥かに上回る盛会になりました。

このイベントは、普段の英語授業の練習成果を他大学の先生、学生の前で発表するもので、内容はミュージカルあり、スピーチあり、それに英語紙芝居、寸劇、歌など盛りだくさんで、予定の3時間半は瞬時に過ぎてしまいました。OPPのルールは発表に優劣をつけないこと、他大学の先生からは学生に人前での発表を意識させることで、授業に活気が出るとの嬉しいコメントがありました。ちなみに、本学からはH&Pの事前英語研修で素晴らしい発表を披露してくれたグループ（青木美弥、金氣珠里、佐伯玲実、二井谷悠美）が“A-bomb Trees”的テーマで、岩井ゼミの3年生9名（岡崎愛実、佐藤やえ華、多幾山祐衣、西田博美、平岡由圭、平川真衣、藤谷真理、村上愛、村田卓也）が“HCU Evening News — Language Service in Hiroshima City”的タイトルで発表しました。このイベント、今年は12月の予定で、すでに今年度未参加の大学からも問い合わせが来ています。次はあなたも参加してみませんか。（文中敬称略）



岩井ゼミ学生によるニュース番組

ダマー (Damah) 映画祭 in ヒロシマ



Havener監督と国際学部のボランティア通訳

2009年、広島で新たな映画祭がスタートしました。広島出身の部谷京子さんが誘致され、本学からは芸術学部の中嶋健明教授が映画祭開催に尽力されました。Damahとはヘブライ語で「インスピレーションを与える比喩」の意味だそうです。初めての映画祭（2009年12月11～13日）は、国際会議場を中心に行なわれ、日本を含むアジアからの入賞作品のコンペと、米国入選作品の上映会が行なわれました。

この映画祭は多くのボランティアによるサポートによって実現し、本学を含む市内11の大学等の学生が米国入賞作品に日本語字幕をつける作業を担当しました。幸運なことに、本学国際学部の有志に割り当てられた作品 *And What Remains* が米国最優秀賞に輝き、監督の Marc Havener 氏が映画祭のため来広されました。上映会では国際学部の二人が通訳として同監督のトークショーを盛り上げました。この映画祭は今年も開催予定です。（報告：国際学部 岩井）

観察報告

- 8/11 沼田高校 2名
- 9/10 進路指導対象教員説明会 14名
- 9/18 鈴峯高校 55名
- 9/28 山陽学園大学 2名
- 10/2 大門高校 28名
- 10/15 呉高校 32名
- 10/29 日彰館高校 23名
- 11/2 日本産業退職者協会 48名
- 11/19 八幡公民館 15名
- 12/3 安佐公民館 22名



～知のトライアスロンNews!!!～

図書館主催事業の「知のトライアスロン（助走編）」が11月16日（月）～2月12日（金）の間で開催されています。語学センターでもエントリーを受け付けています。興味のある人は、語学センターか図書館カウンターへ来てください。また、12月21～22日の2日間で、図書館と共にクリスマスをテーマに映画上映会も行いました。短い期間でしたが、10数名の学生が参加をしてくれました。来年度も、同様の企画を予定していますので、乞うご期待！
＊「知のトライアスロン」、詳しい内容については、次号への掲載を予定しています。

発行日 2010年1月25日

発行 広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集 堀本真由美
伊達美和子（内線：6410）

Phone (082) 830-1509

Fax (082) 830-1794

E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp

ホームページ

[http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/
lang/index.html](http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html)

